

白金蔭

文月



平成23年7月発行 第5号

白金葭月例句会案内

月例句会報（11／7／15 昼寝、松葉牡丹 投句13名）

八月十五日(月) 9:30 ~ 11:00 小池ボート乗場より蓮見

舟吟行。乗船料千円。

12:00 ~ 15:00 (アビスター第五学習室)

九月十六日(金) 12:00 ~ 15:00

(アビスター第四学習室)

十月二十一日(金) 13:00 ~ 15:30

(嘉納治五郎邸跡地邸) バードフェスチバルの日。

蓮見舟参考句（8月15日分）

自転車の天使が消ゆる花蓮
てつや

陽一

着水の川鵜すぐ消ゆ終戦日
遠嫗湖畔の芦は吹かれり

みち

蓮の花盗みカヌーが逃げてゆく
杭々に羽を干すなり川鵜なり

悦子

対岸の高層ビルや蓮見舟

高志

蓮の花葉っぱでかくれんぼ風で顔出す

孝三

相乗りて俳縁結ぶ蓮見舟

多美子

象鼻盆染じむ初の蓮見舟

貞治

蓮の葉の鳥の形に水漬くかな

めぐみ

哲也

トシ子

初戀のときめき残る昼寝覚め

吉羽多美子

海嘯に呑まれし大地ひまはり咲く
わが生は晩年にあり昼寝覚

若き日の我らにありし巴里祭

夕されば閉づる花なり松葉牡丹
炎昼や黒きサテンの夏手套

小山陽也

今年また朝顔の苗頂きぬ

松葉牡丹縁なき庭となりにけり
扇風機カタンカタンと首を振る

四時に起き九時に惰眠の日々となり

半夏生夏至の前にやや白し

塙田空華

鶴鳴の朝の一聲小暑かな

松葉牡丹男世帯を尋ねきて

夏椿ひとりの膳に箸置きを

二代目に売家となる百日紅

青木啓泰

葭切と話してみてもまとまらぬ

昼寝して河童のまちを通りけり

昼寝してあとは散水するばかり

露の葉を放つておけば梅雨上る

昼寝覚西瓜の種が乾きをり

飯田孝二

打水や目覚めて騒ぐ庭の木々

松葉牡丹スタンプを押すことく

思ひ出づ嘉久旧居合歓咲ける

葭の葉に打たれて翔てり行々子

テレビドラマまだ続きをり昼寝覚

増田悦子

縄文の男女午睡の榆の下

増田陽一

目高の夢あめんぼの夢大昼寝

バタイユ読まぬ電力事情金龜虫

海はこの星の青痣あほうどり

蝉鳴ぐにあと一日あり聖橋

松葉牡丹植えてやまざり姫路城

松葉牡丹が嗅ぎある立話

蜘蛛の囲の押つとり刀これやこの

大枇杷やクレオパトラは汗つかき

涼しさや十一面觀音の前うしろ

しうみ
そら

片手は水に工事現場の昼寝かな
風鈴や雨の匂ひのしてをりぬ

城山の松葉牡丹の影を踏み

炎天を草食糸の少年來

水無月やレースのリボンよく売れて

松葉牡丹吾に過ぎたる日差しかな

無為愉し昼寝向ふに妻昼寝

青虫を克服したるキヤベツ巻く

腰に榊幣挿し神樂舞ひ給ふ

夏の月電線の囲の街照らす

母好む

はなだ

縹に魚の丸団扇

夏風開きしままの譜面かな

夏旺ん親子の将棋山くづし

青胡桃くちなはを見し一日かな

ふるさとの海泳ぎる夢昼寝覚

光成高志

梅雨灯し銀鏡神楽を山の民

しろみ

腹の絵のミシギーマウス昼寝の子

板の間や俎上の鯉となる昼寝

ふる里は正土の道日照草

猿山の猿の数だけトマト投げ

倉田紀子

山門や相模湾より夏燕

夏日負ふ茅山門の古刹かな

昼寝など贅沢と云ふ余震かな

節電やアフターフォーへ水を打つ

松葉牡丹ビニール傘のふはり浮く

黒田彰一

光
み
ち

嘉悦羊三

耀終て河岸のトロ箱三尺寝
日照草崩れかけたる海鼠壁
山巔の風をしのばせ夏見舞

笛方の円座にかまえ試し吹き

水無月の流れに鷺の冠羽

笠森の階段長き玉の汗

梅雨明けし笠森寺の日陰道

雷や一陣の風置きみやげ

七夕や笛を抱ぎて女の子

證誠寺狸囃子は夏休み

選句結果(数字は入選数)

5 腹の絵のミッキー・マウス昼寝の子
5 目高の夢あめんぼの夢大昼寝
5 葦切と話してみてもまとまらぬ
3 片手は水に工事現場の昼寝かな
3 海嘯に呑まれし大地ひまはり咲く
3 海ほこの星の青痣あほうどり
3 耽終へ河岸のトロ箱三尺寝
2 初戀のときめき残る唇寝覚め
2 梅雨灯し銀鏡神樂を山の民

杉浦弥栄子

2 鶏鳴の朝の一聲小暑かな

はなだ

2 母好む縹に魚の丸団扇

2 バタイユ読まぬ電力事情金龜子

2 水無月やレースのリボンよく売れて
わが生は晩年にあり昼寝覚

2 松葉牡丹男世帯を尋ねきて
松葉牡丹犬が嗅ぎゐる立話

2 今年また朝顔の苗頂きぬ

2 風鈴や雨の匂ひのしてをりぬ
打水や目覚めて騒ぐ庭の木々

2 松葉牡丹ビニール傘のふはり浮く
蝉鳴くにあと一日あり聖橋

1 若き日の我らにありし巴里祭

1 松葉牡丹スタンプを押すごとく
板の間や俎上の鯉となる昼寝

1 夏嵐開きしままの譜面かな
1 日照草崩れかけたる海鼠壁

1 昼寝して河童のまちを通りけり
1 松葉牡丹縁なき庭となりにけり

1 夏椿ひとりの膳に箸置きを

1 昼寝してあとは散水するばかり

多美子 羊三 空華 陽一 啓泰 そら みち
みち 陽一 啓泰 空華 陽一 啓泰 そら みち

多美子

紀子

陽一

空華

そら

多美子

悦子

陽一

悦子

空華

紀子

羊三

啓泰

多美子

陽也

啓泰

多美子

梅雨

1 思ひ出づ嘉久旧居合歓咲ける
 山門や相模湾より夏燕
 1 蜘蛛の囮の押つとり刀これやこの
 跡の葉を放つておけば梅雨上る
 1 繩文の男女午睡の榆の下
 1 扇風機カタンカタンと首を振る
 夏の月電線の匂の街照らす
 1 夕されば閉づる花なり松葉牡丹
 山巔の風をしのばせ夏見舞
 夏旺ん親子の将棋山くづし
 松葉牡丹植えてやまざり姫路城
 葉の葉に打たれて翔てり行々子
 夏日負ふ茅山門の古刹かな
 松葉牡丹吾に過ぎたる日差しかな
 ふる里は正土の道日照草
 昼寝なゞ贅沢と云ふ余震かな
 猿山の猿の数だけトマト投げ
 無爲愉し昼寝向ふに妻昏寝
 青胡桃くちなはを見し一日かな
 箕方の円座にかまえ試し吹き

悅子 彰一 孝三 啓泰 孝三
 高志 空華 羊三 紀子 陽也
 高志 空華 羊三 紀子 陽也
 紀子 陽也 彰一 悅子 陽也
 羊三 紀子 陽也 彰一 悅子 陽也

犬枇杷やクレオパトラは汗つかき
 テレビドラマまだ続きをり昼寝覚
 城山の松葉牡丹の影を踏み
 ふるさとの海泳ぎるる夢昼寝覚
 水無月の流れに鷺の冠羽
 涼しさや十一面觀音の前うしろ
 昼寝覚西瓜の種が乾きをり
 腰に神幣挿し神樂舞ひ給ふ
 半夏生夏至の前にやや白し
 二代目に卖家となる百日紅
 節電やアフターフォーへ水を打つ
 炎暑や黒きサテンの夏手巻
 青虫を克服したるキヤベツ巻く
 炎天を草食系の少年來

一句鑑賞

光成高志
陽一

バタイユ読まぬ電力事情金龜子

バタイユ(一八九七～一九六一)の『呪われた部分』普遍
 経済学の試み』も読めぬから、現今の電力事情について、
 原発、脱原発とか節電とか大騒ぎするのだ。金龜子が
 を取りに来た昔をよくよく考えよ。一応このように鑑賞

孝三 悅子 そら
 多美子 彰一 啓泰 孝三
 高志 空華 陽也
 そら 高志 空華 陽也

します。バタイユ読まぬならば、わが邦の小林秀雄を読め、本居宣長を読め、源氏物語を読め、万葉集を読め、古事記を読め、いくらでも功利的でない大和魂の古典があるではないかと私流に引き寄せて言いたくなります。なでしこジャパンの世界一は、その流れでしょう。

飯田孝二

悦子

松葉牡丹スタンプを押す」とく

松葉牡丹の名は、松に似た肉質の葉と牡丹を「思わせる五弁の小花に因む。花は紫、紅、黄、白など鮮明。絵にはジャンル、技法各種あるが主題との配偶のよろしさが大事。素人目だが、向日葵は油彩。何せゴッホがいる。桜は土牛。富士は大観、土牛いや北斎。美人画は歌麿、松園。エ、一人? 松花に戻れ? そうそう松葉牡丹、遊亀に描かせたいが、止めは木版。抑々、その元祖スタンプ。松葉牡丹は鮮麗なばかりか花趣純樸、原初の精気が漲る。その質感をとらえるのはこれだ。「押す」とく」がけれど味なく、すばと眼の前の松葉牡丹を置く。直喻は歯切れと発見、驚きがいのち。

光みち

空華

夏椿ひとりの膳に箸置きを

一人だけの食事のテーブルに箸置きをセツトして準備が完了した。何も型に凝つていてる訳ではない。食事前にしぶしぶそれを眺めていると何か心が落ち着いてくる。一口使った箸を丁寧に箸置きに返し、念入りにゆっくり噛めばそこは静寂でときに神妙な時間が流れる。喧騒を忘れない出が蘇る。ふと我にかえればお膳は終りに近づいていた。夏椿が清楚で綺麗な一日花であるように。小生など、徳利・ぐい飲み・箸置きの三点セットがあれば心が落ち着きます(笑い)。

黒田彰一
多美子

飯田孝三

た碑にこの海嘯が使われていたと作者から知らされました。その鹹^{しおばね}き地に植えられたひまわりは、元気よく咲き出し、供華となり、又、被災者を励ましてるのでしょう。」のような嬉しいニュースが増えるといいですね。鹹^{しおばね}きと云う言葉も、作者の句(0号)から借用しました。

海嘯に呑まれし大地ひまはり咲く
海嘯という言葉を今回学んだ。広辞苑では満潮時河川を遡る波立ちの現象であるが、東北の被災地に立てられ

紫蘇の香や日暮れて空の低くなる
そら(4号分)
「空の低くなる」がゾ。一つの情景が目に浮ぶ。一つは日暮れの紫蘇畠、もう一つは、紫蘇を漬け、家事の終、

指に染みる紫蘇の香りには「ほつと一息つく図」。この時季、

家の内外忙しい。麦刈り、田植、片や普段の家事の他に紫蘇、梅漬け、梅干し。日永の一日もすぐ暮れる。指に染む紫蘇の香にふつと母を祖母を思い出す、目交、故郷の暮れなずむ紫蘇畠の空が重なる。「低く」は、梅雨時の気配を思わせ、「一日の疲労感にも叶う。」「なる」が一日の、そして幼児からの時の経過をつたえ、「空」が「ならぬ」のが情感を深める。「日暮れて」、「低く」のビ、グク頭韻が奏効。

ハガキ句第五報（05・7・1）

葭切やお化け煙突どこまで行けば
薔薇百花百日都電ターミナル
ねぎらひの言葉ビルの良く冷えて
電線「吾が家の燕巣立ちをり
この五日散らず汚れず白牡丹
小さき種五月の風にはじけをり
ふと見ると半夏生の葉の白くなり
同窓会梅雨をさけよの声に湧き
掬はれて金魚は椀に泳ぎをり
急流の橋の袂の落し文
鷗外忌初恋といふ厄介なもの
四万六千日水満々と隅田川

孝三 妙子 春美 百合子 陽也 敏子 高志

青木啓泰

紫蘇の香の手にて受けとる赤子かな 多美子（4号分）

「受けとる」という謂からすると、自ら乞うて赤ノ坊を抱かせて貰うというのではなくて、一寸ついでにこの児をたのみますということ。つまりそれで受け取つた。受け取つて抱く者にとつては不意のこととて、紫蘇の香のするままの両手で受け取つた。抱いた赤子には、すでに人間としての重さがあつた。たしかな手ごたえがあつた。人間、バンザイ。（H23. 7. 15）

ハガキ句管見（第五報）

四万六千日水満々と隅田川

高志

七月十日、浅草觀音様の縁日。この日に参拝すると四万六千日詣でたと同じ功德を授かる。前日の九日から、境内には鬼灯市がたち賑わう。仮に、参拝者が一万人あつたとして、一日で国民総人口の三倍分もの功德だ。折しも梅雨の最中、隅田川は、満々と水を湛えて流れる。参拝者の願いをすっぽり容れた如くである。四万六千日と水満々との量感の照応ぶりが秀逸だ。諧謔と存門の妙は心得たもの。文句なしに戴く。手元の歳時記を探つても、例句は多いが、佳句は少ない。僅かに、

夫婦らし酸漿市の戻りらし

虚子

稚き月四万六千日照らす

双魚

掲句の方が正攻、本格で、風格がある。懷も深い。

敏子

新天地、いや新天地に蘇つたと思ひきや、椀の中である。「掬われ」に通うが、一寸法師にあやかる術もない。結「をり」が利く。椀に瞳る作者の目が見える。楽しい諧謔である。俳句は「言わば見せる」文芸。それを地で行つた句である。

急流の橋の袂の落し文

敏子

落し文は、際どくも、命拾いしたわけである。が、世をはかなんでの「置き文」にも思えてくる。それとも拾い主が現われるのを待つてゐるのだろうか。軽妙で、不思議で怖いようだ。急流は底が深い。

高志

お便り広場（到着順、敬称略）

37℃御見舞い申し上げます。トシを加える毎に暑さが身体にこたえます。第四号6・28拝受感謝します。見舞いを兼ねてお話を。盛夏(6・30鬼澤貞治)

初恋が厄介というのが、今ひとつ、読めない。鷗外について勉強不足のせいかも知れない。いつまでも記憶がつきまとつとうといふのだろうか。

陽也

同窓会幹事へ次回期日の注文の声が上がる。結「湧き」に和氣藹々、盛りあがる会の雰囲気が如実。梅雨さんがらの同窓会おひらきの一齣である。（以上、飯田孝三）

薔薇百花百日都電ターミナル

孝三

塩田に百日筋日つけ通し（沢木欣一）の句とマイク真木の薔薇が咲いた薔薇が咲いたの歌を瞬時に思い起した。その心ばかりを都電沿線に思いやつた句ではないかと思います。孝三さんは、大塚公園内の図書館での句会に長くご一緒した。いつも都電荒川線を利用になってお越しになつた。その時の経験は無論、長く都電を利用しての感慨が、俳句と云う形式にのつて示されており、作者の下町への心ばかりに思いがい至ります。都電ターミナルと表現したところがお洒落です。オリエント急行のターミナルならで都電の三ノ輪橋。薔薇百花百日都電ターミナル、舌頭に千轉して破綻しない。（光成高志）

感心しました。私の句の批評ありがとうございます。目下、アマゾンで本の購入を若者にやつもらっています。

岩波新書「ゴッホ星への旅」上下一冊一円、送料なんと二

五〇円、上下で五〇一円でした。暑さにまげずにガンバ

りましよう。どうもありがとうございました。

(6. 29 小山陽也)

〔註1〕「渦巻く太陽、黒い炎のように物狂おしく燃える糸杉」

…一八八八年アルルを訪れたゴッホは、死に至るまでの千日間に驚くべき芸術の開花を成し遂げた。忍び寄る狂気のなかで星への旅を続けた人間ゴッホとは、どのような人物であったのか。彼に魅了されたフランス在住の著者が、十年の構想のすえ、謎に満ちたその肖像を鮮やかに甦らせる。藤村信「ゴッホの病氣もきわめて個性的である。自分の個性に悩まされた。なんとか個性を捨ててしまひたかった。鬪つたけれども、ついに自殺してしまった。ただ、変わったものは征服しなければならない。自分の感情を自ら克服して万人の感情になるようにななければ真の芸術家ではない。云々小林秀雄のCDより。

前略本格的な暑さになりました。此度は白金霞四号をお送り下さいまして有難うございます。号を追う毎に内容体裁ともに充実し益々読みたえのある俳誌になつてまいりました。貴兄のご努力が偲ばれます。私

の旧吟も掲載して下さり恐縮いたしております。又切手もカラーでのせていただいているにはびっくりいたしました。以上拝受の御礼を申し上げます。又吟行でお目にかかるのを楽しみにいたしております。草々
（7. 1 伊藤一艸人）
一艸人さんの北京吟「黄砂の春」抽出六句に感銘しました。どの句にも蒼民に対する作者のやさしい眼差しを感じます。

黄砂ふる北京や犬に遭はずなりき

ふと昔の旅の一齣を思い出しました。「さすがシャンゼリゼはきれいな立派な大通りですね」「いや、やたら犬を連れて歩くので、あつちうちに犬の糞。きれいだなんてとても」「…」四半世紀前、シャンゼリゼに面するあるレストランのドアマンとの立ち話。そう言えば、同時に訪れた東欧圏の首都での街では犬を見かけた記憶がない。ベルリンの壁崩壊に先立つ数年ばかりの頃でした。

「芭蕉のかるみ以後」、芭蕉・野波の両吟を面白く拝読しています。なるほど、(二)の腰に残る「こんにやく」が可笑しい。蒟蒻は尼の食べ物、そのさしみは芭蕉の好物のようですが、その形質を思い浮かべると、「こみ上げてくる」「居合」、「つらり」と「壬生の念佛」もまた、連句の世界が身近になった気がします。

Reed warblers enjoy themselves the dissonance → trying to harmonize~(teacher's correction)。「歌」く有り体に」は、英語俳句でも生きていふる。次号「彰」英語俳句が楽しみです。

会費制にして、田舎屋さんを頼み、高志さんや彰一さんはねむと別な面に時間をさかれてはるのー軒人さんの「提言」に賛成です。そうして、ただけませんか。「ガキ句管見」の筆者名は、「お便り広場」欄のよう、末尾の書きがベターかと思ひますが、いかがでしょ。連載となれば、その方が体裁がいい氣がします。

梅雨明け前から、ぐら棒な暑さですが、「妻の」自愛

♪♪健吟を切に祈りあげます。草々(7・6飯田孝二)

「ひのも嬉しく」

今回の一次余も面白かった。言葉に敏感な人々と鈍感な私。標準語の人々と無アクセントの私。左右に居る人と会話をしながら頷く」とばかりの私ただが「ふふ、待てよ。」ふと思つていた。無知な私はなんでも聞ける。それ故自分の意見を言つてはほんどうない。私は幸運だ。相手の方も嬉しそうに見えたが、それは果たしてふうだつたのだつつか。私は二重の喜びを感じたのだつた。

一次余も脳内体操始まりぬ

ふみそひ(7・17)

暑中御見舞い申し上げます。一句鑑賞同封申し上げます。「芭蕉のかみみ以後」(1)読みました。色々と考えさせられます。しゃレ、連句の思考感覺は、俳人に多い大きな勉強になります。関係と変化の妙は俳句の造形感覺とも無縁ではありますま。我々の「亞」による平不二夫さんの著書「造形のための眼・表現技術の基礎編」をこだいたので読みまして、野波芭蕉の付け流れをいじる興味深く読みました。(H22.7.15青木啓泰)先日の句会では、いつも年、お世話になりました。又々、「丹精された作物をいただき恐縮です。お礼申し上げます。

刃を入れて精気た走る大玉葱
地の林檎馬の鈴とゆじやが薺は

(pomme de terre 仏語=地の林檎)

八月、蓮見舟に加われないのは残念です。蓮見と終戦に因む五句を前もってお送りしますので、よろしくお願ひします。前回お願いした編集の体制の、いへ、せひ、お考え下さい。以上、取り敢えず、一句鑑賞の送信とお詫びまで。破天荒な暑氣の盛り、「妻の」自愛ともいも、御身お大切に、清吟へださる。H.23.7.18飯田孝二)

「」おわたしていま

す。大震災そちらは如何ですか。(H. 23. 7. 12 徳原房代。上の南瓜の絵の葉書)

受贈誌(七月号)

法要の日に山門に燕の巣 (薦 8 号)

森下流子

親鸞忌僧の読經に吾も和す (リ)

"

行列に縋き白足袋袴汚したり (リ)

"

山若葉峠の老婆の菩薩顔

(彩 99 号) 平野ひろし

絡まりて解けぬ地震の吊し雛 (リ)

平山三郎

原子炉は地球の墓標月おぼろ (リ)

川端不二子

剥き出しの五月となりぬ地震の海 (野火)

小澤房子

春の田無残津波の船を押し上げて (リ)

星 昌子

わたつみのいるこの宮ゆ浮いてこい (朝日 7.4)

川瀬佳穂

●「萱」吟行句会 (7 / 8 新宿都厅界隈)

都厅舎の幾千の窓梅雨暑し

緑陰の隠者めきたるホームレス

七月の都庁弁当刀ロリー過多

展望台よりバセリ畑か夏木立

一艸人 末子 洋子 浩司 良子

つながれて猫の昼寝のホテル前
紺碧のビル並び立つ梅雨曇

みち
高志

原稿募集

・句会報の中から一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。鑑賞文は二百五十字(五行)を目途にお書きください。・俳句特別作品は十句、評論、エッセイなどは1ページ(千字)以内、連載できます。挿絵・写真もお寄せ下さい。

我孫子日記

6 / 17 例会。6 / 21 利根親水公園 6 / 22 SOA。6 /

25 国立劇場 6 / 28 井上家屋敷畠 6 / 29 SOA。7 / 1

八重洲 7 / 3 井上家屋敷畠 7 / 4 柏原一茶記念館 7 / 5

野尻湖 7 / 6 斑尾高原より帰新木 7 / 7 久寺家中 7 / 8

新宿・●「萱」吟行句会 神楽坂 7 / 11 我孫子 7 / 15 例会。合

間は水泳、菜園事。

編集後記

梅雨明け途端に猛暑。畑の土もからからに乾いた。原発の放射能汚染は止らない。今度は台風が来て、紀伊半

島から直角に曲つて東に来る。来ている。俳句という夏
炉冬扇に現を抜かしている」と、実人生に何の利益にも
なりませんが、お互いに親しみあい平和に暮らす基には
なつてゐると思ひます。冷静な眼でこの世を渡つて何にな
りますか、と云う小林秀雄のCDを聞きながら、編集し
ました。

芭蕉のかるみ以後（三）

光成高志

1 東風々に糞のいきれを吹まはし

同（春）

〔寺の外の田園では、春の生暖かい風が、糞の悪臭を盛ん
に吹散らしてゐる〕

2 たゞ居るまゝに肱わづらふ

野波（雑）

〔もはや春の農隙ありて、日々はたらき馴らし身を、あ
まりに隙に居る故に、却つて肱など痛くなるばかりだ〕

3 江戸の左右むかひの亭主登られて
〔腕をわづらつて歯痒く思つてゐる折も折、江戸の様子を
収入で、豈の表替へをやつてのけた〕

もたらして、お向うの主人が京都に登つて来られた。こ
れ幸ひとその土産話を聞かせてもらひ

4 こちらにもいれどから臼をかす

野波（雑）

「お向うの家で、亭主が無事帰洛したので、祝ひの宴が開
かれる。それに必要な米を搗くため、唐臼の使用を頼み
に来られた。自分の家でもさし当り要るのだが、隣のよ
しみで快く使はせる」

5 方ぐに十夜のかねの音

芭蕉（冬）

〔十夜の御馳走を作るため、近所から唐臼を借りにくる
時季となつた。十夜の間、方々の家から叩き鉢の音が聞
えて来るのは哀れみ深い〕

6 桐の木高く月さゆる也

野波（冬）

〔冬の夜空に寺々で鳴らす十夜の鉢が響く。桐の木は葉
が落尽して一しほ高く聳え、月の光は寒々と汎渡つてゐ
る。〕

7 門しめてだまつてねたる面白さ

芭蕉（雑）

〔門べには桐が高く聳え、寒月が皓々と照らす。宵の内か
ら門口をとざし、黙つて寝るゝらる心ゆくものはない〕

8 ひらふた金ご表がへする

野波（雑）

〔道で思はぬ金を拾つた。これ幸ひと猫ばばをきめ込み、
門口をしめて、早々に寝てしまふ。さうしてその不時の
収入で、豈の表替へをやつてのけた〕

9 はつ午に女房おやこ振舞うて

芭蕉(春)

〔意外な収入で畠替へをして、家がござつぱりしたから、初午の祭りに女房の親類を呼んで御馳走をする〕

10 又のはるも済ぬ牢人

野波(春)

〔初午に招いた女房の親戚中に主家を浪人して、今春もやはり帰参のかなはぬ武士がある。主人は懇ろにその不遇を慰め、前途の希望に向かつて激励する〕

11 法印の湯治を送る花ざかり

芭蕉(春)

〔花盛りのころ、裕福な山伏が悠々と温泉に骨休めに行くのを、かねて山伏の厄介になつてゐる貧乏浪人が荷持ちがてら送つて行く〕

12 なほ手を下りて青麦の出来

野波(春)

〔花盛りの縄手をだらだら下りると、温泉に通ふ道は、一面の麦畑で、麦の葉が勢いよく伸びてゐる〕

13 泣事のひそかに出来し浅ぢふに

芭蕉(空豆の巻)

〔「」に入れた訳文は大意。原句に付したルビは訳者が付けたもの。文芸読本 松尾芭蕉昭和五十三年1978)p202~203より転載。名残表12句を示した。〕

名残表五句目から注目すると、京のすみずみまで十夜内の鉦の音が響いている十夜の気分を受けて、葉落ちつとして桐の木が高々と聳え、寒月の冴え冴えと澄んでいる夜景に響かせたのである。この前句の冴え冴えと澄みきった気分を受けて、俗世を脱することも出来ない風狂人の姿を点出した。門しめて黙つて寝る自らの境涯を、自ら客観視してこれに興じているような人物、あるいは作者芭蕉自身のあるときの姿ではなかつただろうか。土芳の『三冊子』に「先師いはく、炭俵は、門しめての一句に腰をするたり。誠に方々門人にとへば、皆、泣事のひそかに出来しあさ茅生に、といふ句によれり。先師の思ふ所に非ずとなり」とあって、この句を自讃したというが、いかにも軽妙洒脱、出色の附句と云える。「かるみ」の芸境に近い。かるみの句といつていいのではなかろうか。門人の評判になつていた附句は、

はつち坊主を上あがらす

利牛

らしい家に、人に知られては困るような悲しい出来事が起つて、嘆いている様で、前句のはつち坊主を上へあがらすという言葉から、只ならぬ事態の余情を感じ取つて付けた句である。このような句は、小説的構成の興味で甘味をはなれていない。先師の思ふ所に非ずと也である。

芭蕉のかるみは連句付合の付け方に對して説かれることが多かつたが、連句に限らず発句についても共通する芸境である。かるみとはどのようなものか、まだまだ見ていく必要がある。『去来抄』に次の記事がある。

分別なしに恋にしかるる

去来

浅茅生におもしろげにつく伏見わき

先師

先師、都より野坡がかたの文に、此句を書き出し、此邊の作者、いまだ是の甘味をはなれず。そこもともづいぶん軽みをとり失ふべからずと也。

これは元禄七年閏五月、落柿舎で興行の歌仙に見えるもので、無分別な恋に戯れ興ずるのを、伏見近辺の安宿の賤しい女を相手とする行商人か何かと見た付けである。芭蕉自身はこの歌仙に一座しながら、こういう付合いを甘味と意識していたことである。炭俵空豆の巻のはちつ坊主に泣事のとつけた付合いの句も甘味を脱し得ていないものとして、芭蕉の思う所ではなかつた。桐の木高く月さゆる也、の付け句として門しめてだまつ

て寝たる面白さは桐の木の上に高く冴えきつた冬の月に対し、門口をしめて黙つて寝に付く人をつけた。芭蕉には前年「閉閑の説」を書いた事があり、そのころの自分の気持ちを洩らしたとも取れる。この月への付合いとしてこの時より八年前の貞享二年当時の

名月を隣はねたる草枕

「斎

枝みぐるしき桐の葉を刈
の付合と比較すると、これは未だ名月を眺めるに邪魔になる桐の枝を払う風流のもてなしを付けたあらわな句意の繋がりがある理屈になつており、門しめての句との芸境に雲泥の差異が認められよう。

風流に風流を以つて応えるのも風流なれど、風流にこの世の俗事を以つて応えるのが俳諧である。これも人生の一事がである。実人生にある限り、放下は難事、俗事の柵を切ることは出来ない。拠つて、真如の月といえども、黙つて寝る。そこにこの世の面白さがある。腹をすえた句である。高ぐ月冴るを心の高明なるととりて趣向されたのである。浅茅生の句は、人生の一齣を描いてそれなりに面白いけれども、それだけで連想が広がらない。淡々とした風味ではなく、人生の甘味、お涙頂戴の世界があり、砂の河床が見えてさらさら流れの浅き砂川のような軽さが感じられない。小説的構成の興味があるいわゆ

る面白い句は、かるみには遠いことであろう。
かるみの教説は、特に晩年の芭蕉に親炙した門弟たち
によつても、様々に祖述されており、それは要するに重
み・甘味とは相反するもの、作為・技巧・理屈を排する平
易自然なもの、露骨・説明を避けて表現の余白・余情を
残すように連句の付合いをする象徴的言葉である。

白金霞 第二号 平成二十三年六月発行
編集・発行人 光成高志(FAX)〇四一七一八七一〇六八
発行所〒二七〇-二一九我孫子市南新木二十四丁目
十七

彰一英語俳句

My HAIKU

.Passing a night
in a mountain hut
across the border

Teacher's correction

Passing the night
in a mountain hut
across the border

Best.Excellent work.This haiku has 2 images that are neatly tied together. Here's another example:

Passport check
my shadow waits
across the border